

# ① 物語

① (1) 灰色

(2) 制服

(3) 机

(4) 座高

(5) 枚数

(6) 砂場

(7) 悲鳴

② (1) ア

(2) ウ

(3) イ

③ (1) (例) 通ちゃんに会いたいという、こみあげてくる感情。

(2) 仕事に集中

(3) イ

(4) ア

(5) オレンジの

## 《解説》

(1) 「こんな」は、ふつうすぐ前に述べた内容を指します。「こんなヤツ」は、とおる通ちゃんに会いたい気持ちが強くなって、自分でもどうすればよいかわからなくなっている状態を表しています。

(2) 直後の「まるで、死体のように目は物を見ていない」も同様の様子で、どちらも気持ちを仕事のことだけに集中させている通ちゃんを表します。

(3) 通ちゃんがあまりにも仕事に集中しているので、「私」わたしは、ネコを鳴かせるのもえんりよしています。

(4) 通ちゃんは、やっと仕事の世界から現実の世界にもどり、「私」におどろいたので。

(5) イラストの失敗作にバツテンをつけて、かき直しをしていることがうかがえます。

## ② 物語

① (1) 昨晚

(2) 頂

(3) 磁石

(4) 胸中

(5) 背後

(6) 不気味 (無気味)

(7) 重荷

② (1) ウ

(2) ア

(3) イ

③ (1) やりたくて

(2) イ

- (3) (例) もう坂をのぼるのはやめようと決心した。  
(4) ほんとうに  
(5) (例) ずいぶん遠くまで来たことをこうかいし、帰れるかどうかが不安な気持ち。

### 《解説》

- (1) 「やりたくてやれないことのかずかずの重荷が背につもりつもった」少年は、海を見ることがその重荷が少しでも軽くなるのではないかと考えたのです。
- (2) 歩き疲れて、足がぼうのようになった様子を表すことばを入れます。
- (3) どこまで行っても「はてしない上り下りのくりかえし」なので、海を見ることは不可能だと思い、「もう、やめよう」と決心して、少年はその場にすわりこんでしまいました。
- (4) どこまでいっても上り下りの連続で、海が見えると思っただこと自体がまちがっていたのではないかと考え始めた少年は、投げやりな気持ちになっています。この内容を表す部分をさがしましょう。
- (5) ここまで来た同じ道のりだけ帰らなければならないので、遠くまで来てしまったことをこうかいしています。「日はしだいに高くなる」とあり、今は昼が近い時間であることがわかります。つまり少年は朝出発したので、帰りは、真昼の暑い中を歩かなければならないのです。

### ③ 物語

① (1) 尊

(2) 満潮

(3) 家宝

(4) 奮

(5) 漁師

(6) 幹

(7) 敬

② (1) イ

(2) イ

(3) ア

③ (1) 幻の魚・瀬の主・大魚

(2) (例) 水面から顔を出して息をすうため。

(3) 自分に殺されたがっている  
(4) 漁師

(5) (例) 瀬の主を、死んだ自分の父親の生まれ変わったすがた  
だと思った。

#### 《解説》

(1) 「これが自分のおいもとめてきたまほろし幻の魚」、「村一番のもぐり漁師だった父をやぶった瀬の主」「この大魚」の三カ所からぬき出します。

(2) 太一たいいちは、潜水道具せんすいどうぐなどは身につけていないので、「息がくるしくなつて、またうかんて」いかなければならないのです。

(3) すぐ前に「この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思った」とあります。

(4) 「一人前の」とあるので、太一の職業を表すことばをぬき出します。

(5) 「村一番のもぐり漁師だった父をやぶった瀬の主」とあることから、太一の父は瀬の主を求めて海で死んだことがわかります。太一は、今まさにその瀬の主と思われる魚と対面し、その魚が「海のいのち」であると感じて、殺すことをやめようと思います。その理由を自分で自分に納得なつさせるために、クエが父の生まれ変わりとあると考えたのです。

④ 説明文

① (1) 神経

(2) 除

(3) 城下町

(4) 容易

(5) 比

(6) 研究

(7) 姿

② (1) ウ

(2) イ

(3) ア

③ (1) 人間

(2) イ

(3) (例) 人間と自然とは対立するものであるという考え方。

(4) 永遠にその形を残す

(5) ア

《解説》

(1) 第二段落の最初の文に「人間は自然の一部」とあることに着目します。

(2) 「この思想」は、仏教の輪廻の思想のことで、建物は自然の一部であるとする考えであり、イはその逆になります。

(3) ヨーロッパの考え方の中で、この段落の初めにその内容が書かれています。人間と自然が対立することを中心にまとめましょう。

(5) 日本では木が好まれた理由を、仏教の二つの思想をもとに、二つあげることが文章の主な内容です。

## ⑤ 説明文

① (1) 段落

(2) 割

(3) 補

(4) 障子

(5) 職業

(6) 都合

(7) 忘

② (1) ア

(2) ウ

(3) ア

③ (1) とくべつな理由

(2) (例) 友引は葬儀屋の定休日なので葬式をしないという考え方。

(3) (例) 人が死んだら早く葬式をするのがふつうなので、葬儀屋に休まれるとこまるから。

(4) イ

(5) エ

### 《解説》

(1) もともと、どの日に何をするかよいかよくないということはなく、昔の人が単に便利のために決めておいたただけだと書かれています。

(2) 「葬式をやると思ひ日」ではなく「葬儀屋さんの定休日」というこれよりあとの内容をまとめます。

(3) 「葬式は人が死んだらできるだけ早くやるのがふつう」なので、「人がなくなつたというのに休みもなにもあるか」と言われることになり、それを防ぐために、友引を定休日のようなものにしておくということです。

(4) 前の文が理由となつて、あとに結論が導かれているので「ですから」が入ります。

(5) 文章中では、筆者は仏滅に結婚式をすることも、友引に葬式をすることも、何もさしつかえはないと考えていることを読み取りましょう。

## ⑥ 説明文

① (1) 危害

(2) 開閉

(3) 我

(4) 源

(5) 至

(6) 視野

(7) 将来

② (1) ウ

(2) イ

(3) ウ

③ (1) (例) 短くて急で、こうずいがおきやすい川。

(2) イ

(3) 水とのたたかい

(4) ふった雨を土に返そう

(5) イ

### 《解説》

(1) 「あばれ川」とはどんな川なのかを、最初の段落内容から読み取ってまとめましょう。

(2) アとイは反対の内容が書かれているので、どちらが「ふさわしくない」かを考えます。段落の最後に「はらん原だからこそ、水害のきけんな場所でした」とあるので、イが逆の内容になります。

(3) 「水とのたたかい」を「治水」というと書かれています。

(4) 「ひとくちでいえば」を手がかりにしてぬき出します。

(5) アは、日本の川が短いことは書かれています。世界で最も短いかどうかはわかりません。イは、「日本人はそのあばれ川をじょうずにおさめて、そこに文化をきずいていきます」に合っています。ウは、はらん原は、そこがきりひらかれて文化がきずかれた場所ですが、「つねに」「中心」であったかどうかはわかりません。エは、「生かすべき」が書かれていません。

① (1) 若

(2) 太陽

(3) 作詞

(4) 眼下

(5) 億万

(6) 背中

(7) 像

② (1) イ

(2) ウ

(3) ア

③ (1) かもめくん

(2) (例) 早くあたたかい春になってほしいという気持ち。

(3) (例) かもめくんが、つばさを「ぼく」に一日、かしている間。

(4) エ  
(5) イ

《解説》

(1) ①行目に「かもめくん ぼくに一日」とあることからわかりやすい。

(2) 春をひっぱってくるとは、早く春になってほしいという気持ちを表したものです。

(3) かもめはつばさを「ぼく」にかし、「ぼく」は自てん車をかもめにかすことになります。

(4) 「かもめ」「春」などを人に見立てています。またこのほかに、第一連と第二連が全体として対句たいくになっています。

(5) 「ぼく」は、かもめにつばさをかしてほしいとたのんでいるので、イが合います。アは、シオヒガリにさそっているのは町の人たちです。ウは、自てん車をかしてほしいとたのんでいるので、乗れることがわかります。エは、春がどこかの島であそんでいる相手が「まっくろくろ」の子どもであり、「ぼく」ではありません。

8 ことばのきまり

1 (1) 郵政

(2) 演奏

(3) 劇的

(4) 誠実

(5) 就職

(6) 温泉

(7) 冊子

2 (1) ウ

(2) ア

(3) イ

3 (1) (例) 弟は、成績がいいので有名だ。

(2) (例) 兄が登った山は、あれだ。

(3) (例) 雲が流れる空を、ぼくと兄は見上げた。

(4) (例) うちの犬は、しっぽが短い。



9 ことばの知識

① (1) 創造

(2) 蚕

(3) 縦

(4) 納

(5) 庁舎

(6) 最善

(7) 諸国

② (1) ア

(2) イ

(3) ウ

③ (1) (例) 姉は、知性と教養をそなえた女性だ。

(2) (例) 電化製品は年々進化している。

(3) (例) 試合で、不利な立場になる。

(4) (例) 兄は美的な感覚に欠けている。

《解説》

(1) 「し性」は、名詞の下について、その性質を持っていることを表す。

(2) 「し化」は、主に名詞の下について、そういうもの・状態に変える、変わるということを表す。

(4) 「し的」は、主に名詞の下について、その様子や、それに近い状態にあることを表す。

## ⑩ 漢字の知識

①  
① 砂

(2) 背景

(3) 加盟

(4) 頂上

(5) 就業率

(6) 敬語

(7) 片側

②  
① イ

(2) ウ

(3) ウ

③  
① ① (例) 一日十五分の散歩を習慣とする。

② (例) 週刊の雑誌が創刊される。

(2) ① (例) 新しい機械を整備する。

② (例) かれと仲よくなる絶好の機会だ。

(3) ① (例) 部屋をヒーターで暖める。

② (例) コーヒーをポットで温める。

(4) ① (例) 一夜にして戦場と化する。

② (例) 試合前には自主練習を課す。

⑪ 随筆ずい

① (1) 積極的

(2) 食堂

(3) 手段

(4) 意識

(5) 改

(6) 初夏

(7) 体験

② (1) イ

(2) ア

(3) ア

③ (1) 平ら

(2) 私の発した

(3) 工

(4) ・(例) 目的達成のための有効な手段となる点。

・(例) しばしば目的と化してしまふ点。

《解説》

(1) お茶は「チャー」を尻上しりがりに発音しなければならぬのに、平らに言ってしまったために別のものがきたことが前に書かれています。

(2) 「私」は、日ごろ用いていない言語（ここでは中国語）でも、文法にそって発音すれば相手に伝わることで、道具として機能するという実感を得たのです。

(3) 前文で「言葉」を話題の中心にして、目的ではないと述べています。

(4) 「目的達成のための有効な手段となる」こと、また、「お金も〈手段〉という本来の役割わりを忘わすれられて、目的と化してしまう」とあることなどがあげられます。

12 随筆

① (1) 優先

(2) 置

(3) 目鼻

(4) 暗

(5) 泣

(6) 無事

(7) 示

② (1) ア

(2) ウ

(3) ア

③ (1) ならした

(2) 夫への尊敬と信頼

(3) イ

(4) 女房

(5) ア

《解説》

(1) 文章末の女房のことばかり、これ以前に、「私」は子供の頃、野球でならしたと話していたことがわかります。「ならした」は、そのことをよく経験して、得意であったということ です。

(2) 「女房には夫への尊敬と信頼を…」と書いていましたが、逆に「私」の打球を女房がファインプレーでキャッチしたので、「私」の望みは消えてしまったということ です。

(3) 守備位置を変えておくことは「卑怯」ではなく、作戦の一つですが、あえて「卑怯」ということで、負け惜しみの気持ちを表しています。

(4) 女房はファインプレーをして、「私」はエラーが続き、打つ方でも、同様に女房が「私」を上回っているの、その差で勝敗が決まったと子供たちは言っています。

(5) エラーの言い訳をしている場面です。「四十肩なら、しかたがない」と思っているのです。

① (1) 下手

(2) 関心

(3) 配

(4) 逆

(5) 実際

(6) 練習

(7) 用件

② (1) ア

(2) イ

(3) ア

③ (1) (例) 喫茶店のマスターが、犬を連れて入店するのはだめだ

と言ったため。

(2) ウ

(3) ア

(4) イ

(5) (例) ベルナを連れてこの店に来ること。

《解説》

(1) 直後の「ごめんなさい。犬はお断りしているもので」が、喫茶店のマスターの言葉であることを読み取ってまじめます。

(2) 盲導犬として訓練された犬なので、他の客に迷惑をかけることはないと説明したかったのです。

(3) 「〜かねる」は「〜できない」という意味を表します。

(4) ペットとしてかわれている犬と、訓練された盲導犬は、おおきなちがひがあることを客たちは話しています。

(5) 客が理解してくれたことや、盲導犬についての知識をあたえてくれたことから、マスターは最初の「お断り」を引っこめて、今後はこの店に通ってほしいという気持ちを含めて「ワンちゃんの席に決めよう」と言っています。

① 雑誌

(2) 担当

(3) 誕生日

(4) 私的

(5) 水洗

(6) 展開

(7) 蒸気

② (1) ア

(2) イ

(3) イ

③ (1) (例) これだけあれば生活上間にあうということば。

(2) (例) 深い、かすかな味わいがわかった、という意味。

(3) (例) 別の言い回しが必要になったとき。

(4) エ

(5) イ

《解説》

(1) ——線①の直前に「これ」とあるので、その指示内容をもとにまとめましょう。

(2) 直後の「『深い、かすかな味わいが分かった』では、文章の調子、文体としてだめなときがある」をもとに、設問に合う形に直してまとめます。

(3) 文章では、同じ単語や言い回しをくり返して使うと、美意識がなくなることが述べられています。そこで、それをさけるために、同じ内容を別のことばで表現する語彙力が必要になります。これが「そのとき」にあたります。

(4) 「言語の能力がある」とはどのようなことを述べたエが適切です。

(5) アは「生活環境が変化」「言語生活が貧弱」などは書かれていません。イは「その一回のための単語を蓄えていくこと」に合います。ウは「時代によって変化する」「使い分けが大切」が誤りです。エは、前半の「一生に……」の内容も否定されていません。

① (1) 警備

(2) 筋道

(3) 拡大

(4) 激流

(5) 供

(6) 地域

(7) 疑

② (1) イ

(2) ア

(3) ウ

③ (1) (例) 道で出会った知らない人が、会釈やあいさつをしてくれるときの表情。

(2) むかしからの集落

(3) 人と人のであいの手ごたえ

(4) につきりほえむ

(5) 工

## 《解説》

(1) 筆者が足をむけたくなるので、これより前から、筆者を気持ちよくさせる内容の表情を述べている部分をさがしてまとめます。

(2) 筆者が住む新興住宅地<sup>たく</sup>のかたわらにあり、「表情地帯」と表現されている場所のことです。

(3) 「まったく無表情だから、人と人のであいの手ごたえがない」とあります。

(4) 日本人は「まったく無表情」であるのに対して、欧米<sup>おう</sup>の人は「につきりほえむだろう」とあります。

(5) アの「育てていきたい」、イの「おせっかい」、ウの「あやまらない」はそれぞれ直接話題にされていません。話題の中心を読み取って考えましょう。

## ① 宙

(2) 延期

(3) 刻

(4) 内蔵

(5) 内臓

(6) 自己

(7) 賃貸

## ② イ

(2) イ

(3) ウ

## ③ 大気

(2) 工

- (3) 太陽の死による太陽系の死  
 (4) イ↓ウ→ア  
 (5) イ

## 《解説》

- (1) 「原始的な植物を持ち込んで光合成を行なわせ、大気を酸素型に改造しようというプランがある」とあります。
- (2) このあとに「できるだけ加速させるにはどうすればよいか」とあるので、生物進化の過程を時間的に速めることで
- (3) 太陽も寿命は有限です。太陽が燃えつきるのは遠い将来のことですが、もしそうなれば、地球を含めた太陽系そのものが「死」をむかえます。これに対応するために、太陽系の外に人類の生きる場所を求めるアイデアが出されているとあります。
- (4) 「人類は生息圏を火星まで広げ、同じテクノロジーの応用によって、ゆくゆくは、それを太陽系全体に広げていく」および「やがては銀河系全体に、あるいはさらなる深宇宙へと進出していくのか」から考えます。
- (5) アは、「まだ具体性をもって語るには早すぎる」とあります。イは、「壮大なプロジェクトがいま、専門家のあいだで真剣に検討されつつある」に合います。ウと工は文章中に書かれていなくて、また事実に関係ない点もあります。



短歌・俳句<sup>はい</sup>①  
(1) 拝

(2) 染

(3) 樹立

(4) 以降

(5) 共通

(6) 夢

②  
(1) 秋

(2) 春

(3) 冬

(4) 夏

③  
(1) (第)三(句)

(2) ・枕詞 D

・体言止め B

(3) C

(4) E 冬 F 夏 G 秋 H 春

(5) F

(6) E

## 《解説》

(1) 短歌は五・七・五・七・七が基本的な形式ですが、各句のいずれかがそれより多い音数の場合、字余りになります。Aの第三句は「みじかければ」で六音になっています。

(2) Dの「垂乳根たらしね」は「母」にかかる枕詞まくらことばです。Bは「夕焼小焼やけ」と、体言(名詞)で終わっています。

(3) Cは「驚おどろきぬ」のあとに「。」をつけることができ三句切れて、秋の深まりを柿かきの落ち葉つゆの露たぐに託たくしてよんでいます。

(4) それぞれの句の季語は、E「枯野かれ」、F「万緑ばんりく」、G「秋空あき」、H「雀すずめの子」です。

(5) 俳句はいに使われる切れ字は「や」「かな」「けり」などです。Fの「や」がこれにあたります。

(6) 「全国を歩き回る」「病氣びやうき」「草もかれ果はてた野」などの語に合う俳句をさがしましょう。

18 へいばのきまじり

1 (1) 俳句

(2) 宣伝

(3) 肺

(4) 明朗

(5) 浴線

(6) 遺産

(7) 折

2 (1) ウ

(2) アイ

(3) ア

3 (1) (例) 古い家がこわれる。

(2) (例) 水を静かに流す。

(3) (例) かれはとても速く走れる。

(4) (例) 教頭先生によって林間学校の説明がされる。

①9 ことばの知識

① (1) 卷

(2) 幕開

(3) 絹

(4) 穀物

(5) 頭脳

(6) 盛大

(7) 味気

② (1)

(2) ア  
(3) ウ イ

③ (1) (例) 玉のような男の子が生まれる。

(2) (例) 小さな女の子がちようちよのようにおどる。

(3) (例) せまくても幸せなわが家は、私たち家族の城です。

(4) (例) 都会の夏は、さばくのような暑さだ。

20 漢字の知識

1 (1) 区域

(2) 筋力

(3) 参拝

(4) 存在

(5) 朗々

(6) 賃

(7) 優勝

2 (1) イ

(2) ウ

(3) エ

3 (1) 音読み しきし (例) 色紙にサインをしてもらう。

訓読み いろがみ (例) 色紙でつるを折る。

(2) 音読み どうすう (例) アフリカに生息するライオンの頭

数を調べる。

訓読み あたまかず (例) 作業に必要な頭数をそろえる。

(3) 音読み しゅってん (例) バザーに母が出店する。

訓読み でみせ (例) 祭りの出店に立ち寄る。

(4) 音読み ふうしゃ (例) オランダの風車小屋の写真を見せ

てもらった。

訓読み かざぐるま (例) お祭りて風車を買ってもらう。

21 物語語

1 (1) 並木道

(2) 密接

(3) 満腹

(4) 班長

(5) 競

(6) 神秘

(7) 胸

2 (1) ウ

(2) イ

(3) ア

3 (1) イ

(2) 風変わり

(3) ウ

(4) (例) 園さんは風変わりではないと言ったが、実は風変わりともいえるので、自分の気持ちに確信がもてないから。

(5) エ

《解説》

(1) 父母会で同じ班の園さんのことが話題になったのなら、どんな内容なのか、どうしても聞きたい気持ちが「こまった、という顔の母を、ぼくは追及した」の文に表現されています。

(2) 須田先生の、園さんを表すことばは「風変わり」「無口」です。指定字数に合わせてどちらかを決めます。

(3) すぐ前に「ほめてくださろうとして」とあります。これに合うことばを考えましょう。

(4) 「ぼく」は、口では園さんは風変わりではないと言っていますが、実際は風変わりといえはいえなくはないとも思っています。自分の本心と、口で言っていることがちがうので、自分でもむしゃくしゃするのです。

(5) 園さんのことを母と「ぼく」とで話すうちに、母は班の仲間をかばう「ぼく」をやさしいと言ってくれますが、「ぼく」はまだ気分を直すことなく、母のことばを鼻であしらっているのでエが合います。

22 物語

① (1) 寸法

(2) 判断

(3) 婦人

(4) 似合

(5) 約束

(6) 洗

(7) 輪

② (1) ア

(2) イ

(3) ウ

③ (1) (例) 女の子だということがみんなにわかって、恥ずかしくなったから。

(2) まっかにな

(3) なにしゆう

(4) (例) せつちゃんのことをはじめて女の子だと意識する気持ち。

(5) ア

《解説》

(1) 頭の手ぬぐいが落ちて、女の子とわかる髪が見えるので、男の姿すがたをしていることが急に恥はずかしくなったことをまとめましょう。

(2) 「いつもなら、まっかになって立ちすくんでしまうはずの三郎さぶろう」とあります。

(4) 三郎は、顔にどろをぬられて「もう、ゆるいて」と小声で言うせつちゃんを見て、はじめてせつちゃんが女の子であることを意識して、そんなせつちゃんを守ってあげたい気持ちになっています。

(5) 「せつちゃんのほうは、じぶんのいたずらからこんなことになって」とあることから、三郎とせつちゃんが入れかわるいたずらは、せつちゃんが言い出したことだとわかります。

23 物語

① (1) 乳製品

(2) 孝行

(3) 銀河

(4) 皮肉

(5) 星座

(6) 承知

(7) 望遠鏡

② (1)

(2) ウ  
(3) ア イ

③ (1) はくじょう

(2) (例) 杜子春の父母。

③ ③ ウ ④ ウ ⑦ オ

(4) 杜子春はひ

(5) 母親はこん

《解説》

(1) 閻魔大王は、杜子春に「まだそのほうははくじょうしないか」と言っています。

(2) 「馬は、——ちくしようになつた父母は」とあることから答えます。

(3) ③は、閻魔大王が「はくじょうしないか」と話しかける相手です。④は「母親の声」で「おまえ」と言っているのが杜子春です。⑦は、すぐ後の文に「母親は」とあります。

(5) 母親の声について、「なんというありがたいこころざしでしょう。なんというけなげな決心でしょう」とあります。

24 説明文

① (1) 方針

(2) 貴重

(3) 推理

(4) 濟

(5) 判明

(6) 栄養

(7) 属

② (1) ア

(2) イ

(3) ア

③ (1) ア

(2) おおざっぱ

(3) エ

(4) (例) 気持ちの細かいニュアンスが相手に伝わらない。

(5) ア

《解説》

(1) 四つの語を順にあてはめて、正しい文になるかどうかを確かめましょう。

(2) 一つの表現で済ませる態度を表しています。

(3) 「赤」を話題にしているので、「赤い顔」にあてはまるものを考えます。

(4) たとえば「喜ぶ」には、「驚喜」「狂喜」「愉悦」など、さまざまな違いがあることが書かれています。単に「喜ぶ」では、具体的にどのようなように喜んでいるのか、細かいニュアンスが相手にはわからないということをまとめましょう。

(5) アが文章全体の要旨になります。イは、相手の側の理解については述べていません。ウは、「多くのことばを覚える自覚」、エは「専門的な用語」がそれぞれ話題にされていません。



25 説明文

1 (1) 呼吸

(2) 株

(3) 看板

(4) 幼

(5) 体操

(6) 翌週

(7) 卵

2 (1) イ

(2) ア

(3) ウ

3 (1) (例) 目立つ花をつけて、動物をよぶ必要がないから。

(2) エ

- (3) 花が昆虫に与えている報酬  
 (4) 花粉  
 (5) イ

《解説》

- (1) 風媒花は、風によって花粉を飛ばすので、動物（昆虫や鳥）をよびこむ必要がありません。それで「看板」である目立つ花びらがなくてもいいのです。
- (2) 「多くの花は、蜜やおしべ・めしべのある場所を示すように、紫外線で目立つような色で真ん中に目印がついている」とあることからエが適切です。
- (3) 昆虫たちは、受粉を手伝うかわりに蜜を受け取ります。蜜がなければ、昆虫たちは花に来なくなり、植物は受粉ができません。
- (4) 昆虫たちは、花粉を体につけるようにしなくても、自然につくしくみになっています。
- (5) アは、風によって花粉が運ばれる植物と、昆虫などによって運ばれる植物の、どちらが受粉に有利なのかは書かれていません。イは、「毎年のようにアレルギーで問題になるスギやヒノキは、典型的な風媒花です」とあることに合います。ウは、昆虫には花びらの色はよく見えていないと書かれています。エは花粉ではなく、蜜を目当てに集まっています。

26 説明文

1 (1) 教育

(2) 必要

(3) 評価

(4) 向上心

(5) 知識

(6) 輸入

(7) 巻

2 (1) ア

(2) ア

(3) ウ

3 (1) 向上心をしつ

(2) (例) 強い向上心を持つことが必ずしも求められていない、比較的簡単な仕事をする状況。

(3) 知的向上心

(4) 社会全体の向上心を高めていく

(5) イ

《解説》

(1) 向上心をひとつの技として持ち、それをいつでもどんなときでも用いることのできる人のことを書いた部分をさがしましょう。

(2) 時給単位で働く仕事をするような場合のことが——線②の前に書かれています。この内容をまとめましょう。

(3) 直後の「それは、知的向上心を地道に磨いてきたこと」をヒントにします。

(5) 学歴は、真面目に向上心を持ってやってきたことを示す一定の評価の方法であると考えていることから、イが合います。

27 詩

① (1) 映

(2) 視線

(3) 喜

(4) 義理

(5) 戦場

(6) 向

(7) 降

② (1) イ

(2) ア

(3) イ

③ (1) (例) 戦場の炎で目を焼かれたから。

(2) 工

(3) ゆうべのうちに

(4) 視線

(5) イ

《解説》

(1) おじいちゃんの「戦場で眼がみえなくなった瞬間の／真赤な炎ほのおが見えるんだよ」ということばをもとにまとめましょう。

(2) おじいちゃんは、義眼をつけていますが、それはガラスの玉で、実際は「わたし」も「朝の光」も見えていません。

(3) 夜の中に、ほんとうにおじいちゃんの眼が見えるようになったのではないかと、「わたし」は期待して毎朝のぞきこんでいます。

(4) 実際には見えていないので、「わたし」には「やさしい視線」のように感じるのです。

(5) 詩の最後の連の「戦争のはなしが／わたしの胸むねに重たく溜たまっていく」から考えましょう。

②8 ことばのきまり

①  
① 糖分

② 憲法

③ 尺度

④ 垂

⑤ 裁断

⑥ 批評

⑦ 宗教

②  
① ウ

② ア

③ イ

- ③  
① (例) 明日は雨が降るそうだ。(明日は雨が降りそうだ。)  
② (例) この天気では海で泳ぐ人もあるまい。  
③ (例) ケーキを食べ放題だなんて、まるで夢のようだ。  
④ (例) この石は重くて動かない。

29 ことばの知識

1  
(1) 臨海

(2) 割

(3) 半信半疑

(4) 油断

(5) 成功

(6) 効果

(7) 乱暴

2  
(1) ア

(2) イ  
(3) イ

3 (1) (例) 急な雨の上に風までふいてきて、弱り目にたたり目

だ。

(2) (例) こんな近くに探し物があったなんて、灯台もと暗しとはこのことだ。

(3) (例) 母におこづかいをねだったが、鼻であしらわれた。

(4) (例) 幼い弟の世話に手を焼く。

③⑩ 漢字の知識

① (1) 針

(2) 高貴

(3) 吸

(4) 操縦

(5) 翌月

(6) 幼少

(7) 牛乳

② (1) イ

(2) イ

(3) ウ

③ (1) (例) 飛行機が針路を北にとる。

② (例) これからの進路について親と相談する。

(2) (例) 野生の動物を保護する。

② (例) 動物園のライオンが野性に目覚める。

(3) (例) 冷めた食事はおいしくない。

② (例) 目が覚めたらお昼を過ぎていた。

(4) (例) 弟が一人で家に居る。

② (例) 弓矢の的を射る。

①  
探

(2) 欲望

(3) 歴訪

(4) 忠実

(5) 車窓

(6) 往来

(7) 雑種

②  
ア

(2) イ

(3) ウ

③ (1) (例) 古人の道をたどり、歌枕を実際に確認するという目的。

(2) きかされている

(3) 未知

(4) (例) すでに古人の歩いた道であり、案内者もいるから。

(5) ウ

《解説》

(1) 「すなわち」以降の内容をまとめましょう。

(2) 行ったことはないが、昔からの和歌などを読んで、知識を得ていたという内容のことばをさがします。

(3) すでに書物などでは読んで、その地に関する知識などはある程度持っているので、完全に未知の場所とはいえないということです。

(4) 実際には初めて旅をする地ではあるものの、先人・古人が歩いて記録したものがあることから、不安の一部は解消されます。また、行く先々に俳句の弟子や同好者など、案内をしてくれる人もいたのです。

(5) 路銀(旅のために用意したお金)が少なく、年齢も四十六歳なので、経済的・身体的な面では旅に苦労したといえます。

- (1) 届  
 (2) 勤  
 (3) 簡素  
 (4) 論  
 (5) 講義  
 (6) 謝罪  
 (7) 心境  
 (1) 届  
 (2) ア  
 (3) ウ

3  
(1) ウ

- (2) (例) 関係を良好にしようと思うから。  
 (3) (例) レポートをうまくまとめられなかった謝罪や、講義に  
 対する感謝などの気持ち。

(4) エ  
(5) イ

## 《解説》

- (2) 最後の段落に「通りいっぺんの敬語を使う以上のエネルギーを使う」とあり、それ以降に、「懸命にしようとする」目的が述べられています。この内容をまとめます。  
 (3) ——線③を含む段落の後半に、こうした学生の意図を筆者が推測している部分があります。  
 (4) 昔からの伝統的な日本語の敬語を表すのはエです。  
 (5) 「決して人間関係を軽視したり鈍感になったりしてはいるわけではない」とあるのでイが合います。アは、従来の敬語は身についていないとしても、若者としての敬意を表す表現は使っているので誤りです。



## 随筆

① (1) 日常

(2) 異国

(3) 記念

(4) 富

(5) 移

(6) 常緑樹

(7) 四季

② (1) ア

(2) ウ

(3) イ

③ (1) (例) アメリカは、十六歳のぼくが、初めての旅でおとずれた場所だった。

(2) オブラート

(3) ウ

(4) (例) 当時は、十六歳の子どもがアメリカを一人で旅行することは暴挙だと考えられていたから。  
(5) 資金をカンパしてくれる

## 《解説》

(2) 「日常を包んでいるオブラートのような皮膜」とあります。「ぼく」は、そこから抜け出す機会としてアメリカ旅行を計画したのです。

(3) まるで反応がない表情を表す語を入れます。ウ以外は、何らかの反応を示すことばです。

(4) 海外旅行が一般的ではなく、交通機関も現在とはまったくちがう時代なので、子どもが一人でアメリカを旅行することは、あまりにも非常識すぎて、話にならないと思われることをまとめます。

(5) ようやく、父が「ぼく」の計画を理解してくれて、サラリーマンなのでたいへんなところを、資金カンパをしてくれたことが、実現の決め手になったのです。

- ① (1) 收拾
- (2) 規模
- (3) 発射
- (4) 政策
- (5) 損害
- (6) 現象
- (7) 燃料
- ② (1) イ
- (2) イ
- (3) ア

③ (1) 受け入れの素地

(2) ① 知識の量

② (例) 個人がはじめて経験する失敗で、まわりの人や組織に大きな損害を与えないもの。

(3) (例) 不注意や誤判断など単純ミスが原因で繰り返される失敗。

(4) ウ

《解説》

(1) 「さまざまに分野で」で始まる段落に「このバネを使って大きくジャンプしています」とあります。「この」の指すことが「バネ」にあたります

(2) ① 失敗が、「その人が獲得する知識の量」を決めることを読み取りましょう。この後に「知識の質」にもふれています。② 「ここという」で始まる段落の「基本的には」で始まる内容をまとめます。

(3) ②と同じ段落の「一方」以降の内容をまとめます。

(4) アは「わざと失敗する」、イは「経験していない人はいない」がそれぞれ誤りです。ウは、『よい失敗』というのは、個人が成長する過程で必ず通らなければならぬものに合います。エは、『よい失敗』を『悪い失敗』に直すと正しくなります。

① (1) 困難

(2) 熟読

(3) 散

(4) 表現

(5) 毒物

(6) 大型

(7) 戦略

② (1) イ

(2) ア

(3) ウ

③ (1) 自制心

(2) 人の言うことを聴く

(3) 自己中心的な態度

(4) (例) いろいろなものを読み、それらを自分のものにしてから表現するとよい。

(5) ア

## 《解説》

(1) 「これ」はふつう前に述べた内容やことばを指します。勉強によつて学ぶことができるものを、指定字数に合わせてさがしましょう。

(2) 勉強には、耳を傾けて我慢して聴くという心の構えが求められることから、「聴くこと」が勉強の基本になることを読み取りましょう。

(3) ほかの人の意見を聴かずに、自分だけの考えて行動することを表すことばをさがします。

(4) モーツアルトの例にもあるように、自己表現においても、これまでに発見されたことや考えられたことをまず学んでから始めるのが筋道であると書かれています。

(5) 「本を読むということ」で始まる段落に、「虚心坦懐に、つまり心をすっきりさせて、読む」とあるのでアが合います。

①  
(1) 実験

(2) 態度

(3) 判断

(4) 鉄鋼

(5) 関係

(6) 製品

(7) 個性

②  
(1) ウ

(2) イ

(3) ア

③  
(1) (例) できあがった品が、他のものどちがっていること。

(2) 要員

(3) 人間の個性

(4) ひと味

(5) a プロセス b 職人

## 《解説》

(1) 工芸品や芸術作品が、他のものどちがった味わいのある作品でなければならぬのに対して、だれが作っても同じものが仕上がるのが、工業製品の特徴だといえます。

(2) このような人は「労働者」「要員」とよばれています。

(3) 直前の段落から考えます。本来は、作られたものには技術が、そのものを作る過程にはその人の個性が現れるべきなのに、とがちがえていたということです。

(4) 同じものでも、「他の人とはひと味もふた味もちがったもの」でありたいという願いが述べられた文です。

(5) aは、「過程」という意味を四字で表すことばをさがします。bは、「職人とは、ものを作る手だてを考え、道具を工夫する人」という部分から書きぬきます。

短歌・俳句<sup>はい</sup>

① (1) 暮

(2) 四捨

(3) 夕焼

(4) 桜

(5) 行水

(6) 一輪

(7) 暖

② (1) イ

(2) ア

(3) ア

③ (1) (季節) 春

(2) ウ

(ことば) 桜月夜

(3) 今朝の寒さ

(4) H

(5) (季語) 暑き日 (季節) 夏

(6) イ

(7) けり

## 《解説》

(1) 桜が咲き、月が美しい光景をよんだ短歌です。短歌は、俳句のように季語を必要としませんが、季節を表すことばがよまれている場合は、その季節感などを味わいましょう。

(2) 夏の夜は、まだ宵(夜になったばかりのところ)だと思っ  
ていると、もう明けてしまった、と夜が短いことをよんだ  
短歌です。

(3) 驚いたものが、感動の中心です。

(4) Dは富士山、Hは駒ヶ嶽(駒ヶ岳)の、それぞれ雄大で  
厳しい冬の情景をよんでいます。

(5) 真夏の日が最上川に映り、その川がそのまま海に注いで  
いる情景をよんでいます。

(6) 行水をするそばで虫が鳴くので、虫がかわいそうで水が  
捨てられないという、小さな生き物をいたわるほほえまし  
さが感じられる俳句です。

(7) 切れ字は「けり」「かな」「や」などで、ふつう感動の中  
心にあることばにつきまします。

38 ことばのきまり

1 (1) 遊覧船

(2) 陛下

(3) 自宅

(4) 著名

(5) 入閣

(6) 紅茶

(7) 参上

2 (1) ア

(2) イ

(3) ウ

3 (1) (例) 先に食事をいただく。／お客様からものをいただく。

(2) (例) 先生が発表会にいらっしゃる。

(3) (例) あとから母が参ります。

(4) (例) 市長がこれから話をなさるそうです。

39 ことばの知識

1 (1) 仁術

(2) 大衆

(3) 縮小

(4) 聖

(5) 規律

(6) 善意

(7) 天然

2 (1) ア

(2) ウ

(3) ウ

3 (1) ① (例) より効率よく動くように、機械の改良を行う。

② (例) これまでの方法を改善する。

(2) ① (例) 祖父は明治の人の気質あふれる人物だ。

② (例) 母はやさしい性格の持ち主だ。

4 (1) (例) 人工的な町の中にも、小さな自然は見つけられる。

(2) (例) 都会では自然が破壊され、ビルがどんどん建設されている。

④ 漢字の知識

① 簡易

(2) 論文

(3) 展開

(4) 誤

(5) 探査機

(6) 姿

(7) 窓

② (1) イ

(2) ウ

(3) イ

③ (1) (例) 再三再四、電話をしたが連絡がとれなかった。

(2) (例) 姉は八方美人なので、だれとでもうまくつきあえる。

(3) (例) みんなの前で、公明正大に意見を言うべきだ。

(4) (例) 出された意見は大同小異で、議論は発展しなかった。



④ 第一章

① (1) じよがい

(2) じき

(3) かたほう

(4) すなば

(5) ふんき

② (1) 灰

(2) 車座

(3) 晩年

(4) 潮時

(5) 宝物

③ お母さん

④ イ

⑤ (1) イ

(2) ウ

(3) ア

42 第一章

1 (1) せいくら

(2) いただ

(3) きけん

(4) ねふだ

(5) わす

2 (1) 敬愛

(2) 割

(3) 城

(4) 胸囲

(5) 枚数

3 ウ

4 (1) エ

(2) ア

(3) ウ

(4) イ

43 第二章

1 (1) こと

(2) じゅうらい

(3) なんかい

(4) してき

(5) いこう

2 (1) 温暖

(2) 雑誌

(3) 肺

(4) 供

(5) 層

3 (1)

(2) ウイ

(3) ア

4 (1) すたすた (と)

(2) カタカタ

44 第二章

1 (1) はいじん

(2) やちん

(3) けんとう

(4) かくちよう

(5) りゆうは

2 (1) 宇宙

(2) 延期

(3) 樹立

(4) 刻印

(5) 自己

3 (1) まるで夢のような風景だ。  
(2) ここは、さながら楽園のようだ。

4 (1)

(2) ア

(3) イ ウ

45 第三章

1 (1) きちよう

(2) てんこ

(3) かぶけん

(4) きゆうちやく

(5) たいそう

2 (1) 腹筋

(2) 班

(3) 密

(4) 寸断

(5) 方針

3 (1) に  
が  
た

4 (1) 頭

(2) 足

(3) 手

46 第二章

①  
①  
りんじ

(2) こうよう

(3) ちち

(4) ぼう

(5) しゃく

②  
①  
看護

(2) 映

(3) 濟

(4) 推理

(5) 並

③  
①

(2) ア

(3) イ

④  
①  
①  
容器

(2) ①  
異議

②  
②  
陽氣

(2) ②  
意義

47 第四章

1 (1) も

(2) かいしゅう

(3) い

(4) ちゅうせい

(5) ろんりてき

2 (1) 探訪

(2) 窓

(3) 勤勉

(4) 簡潔

(5) 届

3 (1)

(2)

(3) ウ

イ

ア

4 (1)

(2)

絶体絶命

故事来歴

48 第四章

1 (1) ほうさく

(2) しゅうにゆう

(3) いよくてき

(4) ちよしや

(5) こうてつ

2 (1) 姿

(2) 射

(3) 暮

(4) 誤解

(5) 捨

3 (1) 拡大

(2) 公開

(3) 近海

4 (1)

(2)

ウ イ